



わたし ^{かいせつしゃ} 私がプラネタリウム解説者になったいきさつ

はじ 初めて天文に^ふ触れたのは小学4年生。読書にハマっていた^{ころ}頃です。私は図書館の本を^{たなたんい}棚単位で読みたおすことを思いつきました。はじめは^{ぶんるい}分類番号 900 番文学の棚。次は^{しぜんかがく}400 番自然科学の棚です。

そこで色とりどりのえもいわれぬ^{すがた}姿の^{せいうん}星雲・^{せいだん}星団の写真、つまり^{うちゅう}宇宙の^{しんぴ}神秘と出会ったのです。ちょうど、プラネタリウムへの遠足もあり、宇宙を身近に感じる事ができました。宇宙^{ねつ}熱の^{はっしょう}発症です。そこから同級生を^ま巻き込んで、プラネタリウムツアーを^{かいさい}開催したり、^{せいざ}星座クイズで遊んだ日々を^す過ごしたのを覚えています。

高校では当然のように、物理部天文班^{とうぜん}に^{はん}所属しました。文化祭では^{せんぱい}先輩の手作りプラネタリウム（^{きんぞく}金属ボウル^{せい}製）で^{かいせつ}生解説を^{ひろう}披露しました。しかし、^{きやくせき}客席からは「どれ?」「わからない。」などの声が聞こえてきます。



科学工作コンクールで高校生団体賞をいただきました。レリーフは市立名古屋科学館（現：名古屋市科学館）です。

解説が^{つたな}拙かったのか、^{とうえい}投影の光が弱かったのか今となっては分かりません。まだまだ、その時の私には、宇宙の不思議を伝えるのは、^{むずか}難しかったようです。大学では天文部を立ち上げ、社会人では科学館の天文クラブ^{しよぞく}に所属するも時間の関係で活動できず、パソコン^{つうしん}通信のボード上で^{ていど}語らう程度に^{ねつりよう}熱量は下がっていました。

でも、タネ火は消えていません。時は流れ、親となり、日本宇宙少年団（^{つうしやう}通称 YAC）という組織に出会います。子どもは^{しぶ}団員、私は支部リーダーとして活動しました。そうするうち、私の「宇宙熱」に^{ねんりよう}燃料が注がれました。こうして、今では、仕事を通じて、みなさまに星や宇宙の話をお^{とど}届けしています。